



1. ガレナ釉描柳文楯円皿 パーナード・リーチ 1952年 縦33.4cm
2. 鉄砂土瓶 濱田庄司 1937年 径15.1cm
3. 辰砂筒描食籠 河井寛次郎 1940-50年代 径19.1cm
4. 萬葉譜 梅の欄 棟方志功 紙本墨摺 1935年 縦42.6cm

1	2	3
4	5	6
7	8	9

5. 花紋カルトン 芹沢銈介 1932年 縦49.0cm
6. 无有好醜 柳宗悦 紙本墨書 1950年代 縦35.4cm
7. 色絵草花文皿 鈴木繁男 1939年 径32.2cm
8. 型染柘榴文布（部分） 柚木沙弥郎 1980年代
9. 灰釉流掛鉢 武内晴二郎 1960年頃 径48.2cm



記念講演会 作家の創作と工人の製作 -民藝における創造性の秘密
 (講師) 松井健 (東京大学名誉教授) (日時) 3月11日(土) 18:00-19:30
 (料金) 300円 (別途入館料が必要) (定員) 100名 (要予約)

□開館時間 10:00-17:00 (入館は16:30まで) □休館日 月曜 (ただし祝日の場合は開館し、翌日振替休館) □入館料 一般 1,100円 大高生 600円 中小生 200円 □所在地 〒153-0041 東京都目黒区駒場4-3-33 □電話 03-3467-4527 □交通 京王井の頭線駒場東大前駅西口より徒歩7分 □西館公開日 会期中の第2・第3水曜日、第2・第3土曜日 (入館は16:00まで)

<http://www.mingeikan.or.jp/>

日本民藝館



旧柳邸応接室に並ぶB・リーチ、河井、濱田、芹沢作品 [写真はイメージです]

創設80周年特別展

柳宗悦と民藝運動の作家たち

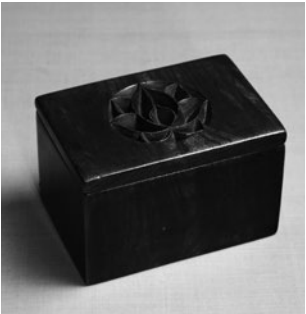
バーナード・リーチ 河井寛次郎
 濱田庄司 芹沢銈介 棟方志功
 片野元彦 船木道忠 黒田辰秋
 柳悦孝 金城次郎 鈴木繁男
 岡村吉右衛門 島岡達三 武内晴二郎
 柚木沙弥郎 船木研兒 ほか

2017年1月8日(日) - 3月26日(日)

日本民藝館



地釉胴紐湯呑 濱田庄司
1920-30年代 高10.0cm



拭漆蓮華刻文笈箱 黒田辰秋
1930年 幅13.4cm



黄釉兔文皿 船木研児
1960年代 径20.7cm



SPレコード「Leach、河井寛次郎、
濱田庄司、柳宗悦司会・座談会」1953年

それまで顧みられることのなかった、民衆が用いる日常品の美しさに着目した当館創設者・柳宗悦^{やなぎむねよし}は、陶芸家^{かわい かん じろう}の河井寛次郎、濱田庄司^{はまた だしょうじ}と図り、その無銘品に民衆的工芸を略した「民藝」という言葉を冠します。そして民藝品や、同様の美しさを宿す作物を精力的に蒐集し、それらの公開と民藝運動の拠点として、1936年（昭和11）に日本民藝館を開設しました。柳は所蔵品が持つ美しさを「美の標準」と捉え、その特質と価値を館としての活動や著作などをおして広く普及させていきます。

また開館以来、工人生んだ新旧の民藝品とともに、民藝運動の作家による作品も常に展示をしてきました。柳はこの二者について、一方には背後にある伝統への依存と実用性を指摘し、他方は創造における独自性と鑑賞品に傾き易い性質をも認め、非個人的な他力の道と、個人的な自力の道とに分けて考察をします。そして作られる量やその価格だけでなく、製作意識の点でも大いに差異があることを示しました。とはいえ両者を、互に矛盾したり反撥したりするものとしてではなく、一つの峰に向う異なる道筋として捉え、頂に到れば会い交えるのだと述べています。

最晩年の柳は語ります、「民藝館同人の作家達の特質は、その作品の基礎が、何よりも民藝品への敬念に根ざしている点であります。つまり自分達の心の場の至らぬ事を深く内省しつつ仕事を育てているのであります。（中略）決して民藝品と無縁ではないどころか、それにあやかり度いという謙虚な気持ちを、いつも失ってはをりません」。さらに、「私共が民藝館を建てました時、特に一室を同人作家の作品に献げましたのは、もとより作品の美しさを採りあげた事にも由りますが、これら作家の品と民藝品とが、そんなに矛盾するものではなく、却って協調しまた提携して進むべき方途を示す為でもありました」と記しています（「作家の品と民藝品」1960年）。

しかし、日本民藝館が創設されて80年、柳が歿してから既に半世紀以上の歳月が経ち、この間に作り手を取り巻く環境は、自然や社会情勢、手法やその材料も含め著しく変転しました。今日、柳が願った個人作家の在り方を実現するのは、決して容易ではないことも事実です。柳とともに民藝運動を推進した作家たちがどのような道をたどり、作品を残したのか、この機会にその行跡を見直すことはたいへん意義深いことだと思います。

本展では、民藝運動を牽引した河井、濱田をはじめ、バーナード・リーチ^{せりざわ}、芹沢銈介^{けいすけ}、棟方志功^{むなかた しこう}の作品を一同に展覧し、その魅力にせまります。また彼らに続く片野元彦^{の もとひこ}、船木道忠^{ふな き みちただ}、黒田辰秋^{くろだ たつあき}、柳悦孝^{やなぎよしただ}、金城次郎^{きんじようじろう}、鈴木繁男^{すず き しげお}、岡村吉右衛門^{おかむら きち えもん}、島岡達三^{しまおか たつぞう}、武内晴二郎^{たけうちせいじろう}、柚木沙弥郎^{ゆの き さ みろう}、船木研児^{ふな き けんじ}ほかの作品もくわえ、併せて柳の書や原稿、関係書籍なども展示し、民藝美に触発された作家たちの仕事を全館にわたって紹介します。

初上映「Leach、河井寛次郎、濱田庄司、柳宗悦司会・座談会」

創設70周年記念事業として2005年から始まった、旧柳宗悦邸の修復工事において、SPレコード4枚が発見されました。バーナード・リーチ、河井、濱田、柳が焼物について語ったその内容は多岐にわたり、忌たんのない発言によりきわめて示唆に富むものとなっています。四人による音声資料の存在は記録がなく、恐らくこのレコードが唯一のものといえるでしょう。録音は1953年（昭和28）11月17日、新大阪ホテルにおいておこなわれました。本展ではこの音源を基に制作した映像を、西館公開日（第2、第3水曜日と土曜日）に旧柳宗悦邸食堂にて上映をいたします。

□西館公開日 1/11、1/14、1/18、1/21、2/8、2/11、2/15、2/18、3/8、3/11、3/15、3/18

□開館時間 10:00-16:30（入館は16:00まで）

展示室 1 階

〔玄関〕柳宗悦と民藝運動の作家たち

〔第1室〕柳宗悦（1889-1961）の仕事

宗教哲学者として出発した柳には作家としての作品はありませんが、その独特なコレクションと、基本設計も手掛けた日本民藝館そのものが、柳の最大の作品と呼べるかもしれません。ここでは、自著の装幀や関連書籍、自らの心境を記した短文などを中心に紹介します。

〔第2室〕バーナード・リーチ（1887-1979）の仕事

幼少期を日本で過ごした英国人リーチ。1909年に再来日し、柳宗悦らとの親交をきっかけに作陶を始めます。英国セント・アイヴスに築窯したリーチは、両洋の陶技を融合させた独自の作風を構築。本室では、陶器作品をはじめ詩情あふれる版画や素描などを紹介します。

〔第3室〕柚木沙弥郎（1922- ）の仕事

柳宗悦の思想と芹沢作品に啓発され染色家となった柚木は、創作の他、後進の教育にも力を注いできました。近年はパリのギメ東洋美術館など国内外で展覧会を開催、今なお旺盛な制作を続けています。本室では作者からの作品寄贈を記念して、旧所蔵品とともに氏の多彩な作品群を紹介します。

展示室 2 階

〔大展示室〕柳宗悦と民藝運動の作家たち

〔第1室〕芹沢銈介（1895-1984）の仕事

柳宗悦の「工藝の道」を読み深い感銘を受けた芹沢は、1928年上野の御大礼記念国産振興博覧会「民藝館」で見た沖縄の紅型風呂敷の色と模様に強く惹かれ、型染を生涯の仕事としました。柳を唯一の師とし、その仕事は着物・帯・のれん、和紙の暦、本の装幀など多岐に亘っています。

〔第2室〕河井寛次郎（1890-1996）の仕事

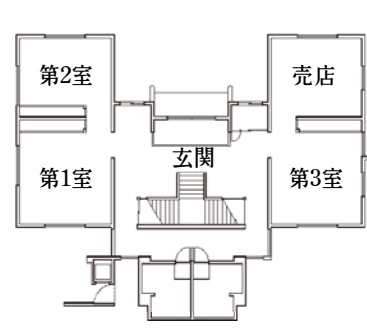
濱田を介して結ばれた柳宗悦との親交を契機に、技巧を凝らした作品から実用を意識した制作へと自身の作風を一変させた河井。「色彩を引き受け」た作家であると柳は評しました。本室では、柳の眼により選ばれた館蔵の河井作品の中から、色鮮かな釉薬の仕事などを紹介します。

〔第3室〕棟方志功（1903-1975）の仕事

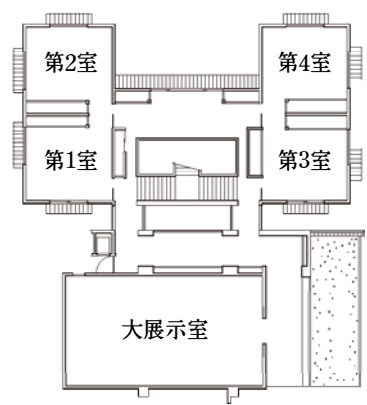
独特な作風が注目され、日本民藝館が作品を買い上げたことを機に、柳宗悦らと親交を深めた棟方。以後柳を師と仰いで制作したため、当館の作品は初摺の板画がほとんどで、また柳考案の屏風装や掛幅装に仕立てられているのが特徴です。柳との交流期の代表作を紹介します。

〔第4室〕濱田庄司（1894-1978）の仕事

リーチを介して、柳宗悦と出会った濱田。河井とは学生時代からの友人でした。リーチと共に渡英し、帰国後は栃木県益子に生活の拠点を定めた濱田は、用に即した堅実で力強い陶器作品を制作しました。本室では、碗や鉢、土瓶など食器類を中心に紹介します。



染付瑠璃絵「安堵村月夜」陶板
富本憲吉 1921年 径20.0cm



呉須筒描花文茶碗
河井寛次郎 昭和時代 径13.7cm